

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幅ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

「社会通信」の発行体制の変更に……

■巻頭言■

『社会通信』ホームページ開設と

社会通信社……2

『本誌』発行体制の変更に……

『原子力政策大綱』と原子力委員会の責務

原野人……3

—小泉氏の狙いと自民党のゆくえ—

悔し涙こぼれる

立花 創暉……5

—北教組運動の現状—

さあ、国労らしく、闘いの一步を踏みだそう！

……7

—職場の焦点は、要員不足—

私でよかったら呼んでください！

毛利 孝雄……9

—「毛利孝雄(mochan)の沖繩レポート」協力をお願い—

人間的成長を求めて

滝野 忠……11

—信州 松本、小布施、飯綱、長野への旅—

読者からのおたより……

14

刊 旬 社 会 通 信

NO. 1158

二〇一三年二月一五日号

二〇一三年二月一五日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

『社会通信』 ホームページ開設と
『本誌』 発行体制の変更について

『社会通信』 ホームページ開設と『本誌』 発行体制の変更について」（前号一一五七、十二月一日付）、ご覧いただいたでしょうか。お叱り受けるんだらうな、そうでなければ寂しいなと思いつけていたところに、さっそく心配とお叱りの連絡です。

「来年は消費税増税、これから物価が上がる時、どうして三百五十円に値下げする！」

『通信』はいちばん楽しみなのに、これじゃつぶれてしまうではないか！」

「リングラフ二色刷で印刷して郵送分を今の半額にするのは分かりました（減部になるだけでしょから、手間代が出るように）。ホームページアップの方は、有償のみアップ可能では？ PCのことはよくわかりませんが、メーリングリストのような形にするのでしょうか。」

「私の担当者三名に状況を話しました。三名ともパソコンを所持ですので、閲覧には問題はないとのことです。ご意見がありました。無料には抵抗がある。閲覧料金を取ってもいいのでは、原稿料、その他の出費があると思うので、是非、無料ではなく、有料でお願いしたいと。私も同感です。」

「何点か意見を申し上げます。①取材費を捻出すべき、②私のとこの夫婦は、通信到着後にまず妻が見出しをみてから読者の声、これ〇〇さんではないのと私に手渡してから読み始める。パターンです。読者の声が掲載枠の規制ありませんが、少々拡大いただければありがたい。北海道「珍道中」はおもしろかった。③憲法改悪、原発、医療・介護など、これからの行く末を左右する問題が山積で、ホームページ無料は認められません。④社会通信・滝野さんが発掘してきた人脈は半端なモノではないと存じます。いろいろな運動に添加されているとは思いますが、話し合う場が、持ち寄る場が、学ぶ場が、通信だったんですね。」等々。

「今、通信が届いたが」と電話いただいたり真夜中にメールくださったり。たくさん読者のみなさまから、ご心配いただいていることに、嬉しくて涙が出ました。

こんな熱い読者に支えられていたのだからこそ、四十年近くやってこられたんだと。

「通信」は一九七七年から激しさを増した社会党攻撃に抗しての発刊でした。それから四十年弱、編集子ももうすぐ七十歳に届くまでになりました。

社会通信社は組織ではなく個人です。こんななか、どうやれば読者と安定的な関係が築き上げられるか、科学的社会主義の理論を堅持しながら、予想される反動の時代に備えたい、その体制を余力のある今つくっておきたいが問題意識です。

来年四月一日号からは、月二回の発行は続け、購読料を今の半額の月額三百五十円（メール送信購読料はその半額の月額一七五円）にし、インターネットは無料でご覧いただけるようにいたします。詳細は左記のとおりです。心からお願ひ申し上げます。「安すぎる」とお考えの皆さんからのカンパは大歓迎です。

発行体制の変更は、次のようにいたします

(1) 時期 二〇一四年四月一日号より

(2) 月二回発行は四月以降も当面継続し、ホームページを立ち上げ、四月一日号より全ページをPDFで閲覧可能にします。『通信』冊子のスタイルは現在、「B5横開（用紙横サイズ五一四㎜）・オフセット印刷」「中綴じB5リングラフ印刷、ホチキス留め」

の両方から成りますが、四月一日号より全ページを「B5リソグラフ赤黒二色印刷・ホチキス留め」とします。前号（一一五七）の12頁二色刷は、四月一日号からの表紙の見本、5〜11ページが本文の刷り上がり見本です。なお、ページ数は現行は14頁を基本にしていますが、四月一日号からは12頁を基本とします。

(3) メール配信も四月一日号から行います。配信希望の方は三月十日迄にご連絡下さい。送信先は必ず、社会通信メールアドレス（本誌表紙右下に記載）へ。

(4) 現在の『通信』購読料は月額七〇〇円。来年四月からの送本希望者の購読料は、月額三五〇円、メール送信購読料は月額一七五円。請求は「六ヵ月前納制」。

(5) 六ヵ月前購読料（現在四二〇〇円、四月から二一〇〇円。メール送信一〇五〇円）ホームページアップは発行日の一ヵ月おくれとなります（たとえば、四月一日号は五月一日号の送本・送信時にアップ）。それで良として閲覧くださる方には、四月分以降の「停止」の連絡と振込先口座をFAXかメールでご連絡下さい。四月以降の購読料前納分は返還します。

(6) 現在ご購読いただいている方々が、来年四月から、どのような方法を選択していたでるか、請求書発行の際に問い合わせたいします。

長くご愛読いただいている皆様には、突然の連絡で申しわけありません。『通信』を閉じるわけではありませんので、ご理解のほどお願い申し上げます。（滝野 忠）

『原子力政策大綱』と原子力委員会の責務

―小泉氏の狙いと自民党のゆくえ―

『原子力政策大綱』のゆくえ

原子力委員会は一九五六年に発足したが、初代の委員に就いた湯川秀樹氏は、必要な基礎的研究もないまま政府・通産省が原発を推進しようとすることに抗して間もなく辞任した。

何年か後の委員に推された有沢広巳氏については、原発推進に利用されて反対運動を抑えることになるだけでつまらないと、新潟を始め現地の皆さんと我々は辞職を希望した。有沢さんには面識がなかったので向坂逸郎先生に相談すると、「有沢君はどこからでも頼まれればいやといわずに引き受けてしまうから…」と言いながら、こちらの意を伝えて下さった。氏は直後に辞任された。

政府の「有識者会議」といえば、安倍晋三君好みの人選でつくられているが、原子力委員会が策定してきた『原子力政策大綱』（旧くは『原子力開発利用長期計画』、ほぼ五年ごとに改定）を廃止すべきだという。経産省が策定する『エネルギー基本計画』があれば十分であるとする。「有識者会議」は原子力委員会の存廃を含めた組織のありようを論議して、間もなく報告書をまとめるらしい。

これは福島の大惨劇に目をつむるものである。今までの原子力委員会も経産省（旧通産省）も、原発推進に猪突猛進してきた。いずれも原子力マフィアの配下にあつたからである。残念ながら経産省などの国家機関を、にわか独占資本のための機関でなくすることはできない。

しかし脱原発の闘いの盛り上がり次第では、原子力委員会のメンバーを、よりまともな人にするにはできる。さまざまな名目で関連企業から金を受け取っている学者などを排して、原発に批判的であった学者や専門家に代えることは不可能ではない。

委員に一人や二人だけ反対論者や慎重論者が入っても意味はない。大事故を起こした日本では、ドイツに恥ずかしくないように、原子力マフィアとは無縁な学者・専門家や経済学者や哲学・倫理学者等によって、委員会を刷新することこそ必要である。

もつとも日本の労働組合が連合のように独占資本の全き子分となって、原発を擁護したり、政府が二%の物価上昇や三(間もなく五)%の消費増税を進めているのに、賃金(労働力の再生産費)は一%の上昇(それもベースアップではなくとも)で十分とするほど、資本に隷従しているままでは、まともな原子力委員会などできようはずもないが。

原子力委員会に必要な任務

いま新たな原子力委員会が果たすべき任務は、第一に、福島第一原発をどのように収束させるかだ。汚染水を増加させないためには、いかに地下水から遮断するか。崩壊熱が漸減するなどの時点で、どのような空冷に移行すべきか。それに先立って、亜鉛や鉛やはんだなど融点の低い金属の粉末を水に混ぜて投入するのが良いかなどを明示すること。第二に、小泉元首相らの進言を活かして、再稼働なしに、建替えや増設等もゼロとして、「もんじゅ」や再処理工場も含め全原発をどのように廃炉処理、管理していくのがよいかを明示すること。第三に、原発輸出の中止を前提として、各原発から出る各種の放射性廃棄物をどのように処理・管理してゆくべきかを明示することだ。これらこそ圧倒的多数の国民が期待するところである。

小泉氏の狙いと自民党

小泉元政治部長の動向には独占資本の背景があることは本誌十一月一日号に述べた。名古屋の後に木更津法人会にも招かれ、また日本記者クラブでも講演している。ガスや石油や自然エネルギー関連は言うまでもなく、自動車や鉄鋼や化学等まで、脱原発を望むようになっているのである。もしかすると巨額な投資や融資をしてきた金融機関等も、東電の事態から原発には危機感を抱くようになっていのではないか。独占資本内に対立が大きくなっているとき、自らの支配体制が危機に進展しないように、それを調整するのは国家の役割である。

自民党の中にも対立が膨らんでいる。奇人・変人が吠えるのは息子の人気取りだけではない。安倍政治部長のあまりにも露骨な基幹独占資本(三菱、日立、東芝や九電力等々)のための諸政策は、さほど遠くないうちに安倍人気を落とさざるを得まい。原発の輸出・再稼働・建替え推進と戦争する国への猛進は、〇・一%にも満たない独占資本家階級のために、九九%超の国民(主に労働者階級)を犠牲にする道である。急変するほかはない国民感情の受け皿がないままでは、自民党の凋落に到りかねない。

小泉氏らが救おうとしているのは国民のいのちや生活ではない。独占資本の支配を安泰にするために、その政治部を救おうとしているのである。(原野人)

悔し涙こぼれる

―北教組運動の現状―

はじめに

安倍自公政権は、天皇元首化や集団的自衛権の行使、国防軍の創設などの憲法「改正」をねらい、その地ならしとして「教育再生実行本部・会議」の設立と改革教育基本法に基づく国家主義的な教育を進め、「戦争をする国づくり」に向けた動きを押し進めようとしている。労使自治に介入して、地方交付税・義務教育国庫負担金削減による地方公務員給与削減を強制し、勤務・労働条件を切り下げている。

このような全国状況の下で北教組は、「選挙違反問題」の影響から抜け出ることができずに呻吟している。道議会自民党は、衆・参自民党と連携して「日の丸・君が代」強制、「学力（体力も含め）向上」、いじめ防止条例制定、勤務態様などについて質問を浴びせ、道教委の「前向きな回答」を引き出している。さらには、北教組大会議案の内容まで引いて、道教委通知・通達との齟齬（そご）を指摘し、抗議し、是正させるよう道教委に迫っている。

組織の現状

組合員数は、公称一万七〇〇〇人とされている。全道組織ではあるが、連合加盟を巡って離脱していった渡島・裕山・根室・釧路・宗谷地区では、組織再建がされたが少数組合となっている。少子化の下で学級数の減少や期限付き・臨時教員の採用により、組合員数は減少している。

一五年にわたる道の給与独自削減に加えて退職金四〇〇万円削減と全国的な地方公務員給与削減により、労働意欲は激減している。ここ数年にわたった文部科学省の「組合活動調査」の強要と処分、関連する服務規律の厳正な実施など管理強化はさまざまく学校現場は、息も絶え絶えである。

多くの組合員は、非常に厳しい学校現場にあっても、北教組本部の不十分な「方針と指導」に不満を抱きながらも方針に従ってたたかっているし、目の前にいる子どもたちの成長を願いながらもひたすらまじめに教育活動に取り組んでいる。

取り組み

〈楽しい学校・わかる授業〉を目指して本来的な「学力」のあり方を意識した授業研究などの教育研究活動に取り組んでいる。しかし、「学力向上」に籍口（しゃこう）した全国学力テストの実施の中で全国最低レベルとのレッテル張りの下に、道教委の「学力向上」運動に関わる通知・通達により「楽しくない学校」「テスト漬け」にされており、子どもたちや教員を苦しめている。道教委は、本質的な学力向上対策というよりも、全道一律のチャレンジテスト実施などのテスト習熟対策に偏している。

この間、指摘されているように「生活格差」が「学力格差」に直結していることは明白であり、この社会的背景を抜きにして、学校の主体性や子どもたちの実態を無視した対策は、子ども・父母・地域住民・組合員・教職員に苦痛を強いるだけである。

八月末より、支会（札幌は区、他は町村組織）・支部・全道と一月初旬まで教科別・問題別（生活指導・職場の問題・父母と語る会など）に教育研究集会を開催してきており、一月末の日教組教研と繋がっている。超多忙化・管理強化の下で参加者が減ってきており、レポート数も減り、内容も低下している。

いじめ問題、教師は多忙化 いじめ問題が頻発する中で、「道徳」の教科化などの「国家道徳」の強要と厳罰主義（警察の介入）を基本とした「いじめ防止法」が制定されたことに伴って、道議会における自民党の条例制定の追求の下で道教委もその方向で検討を始めている。現在の道教委の内実を見るならば、防止法と同様の条例が作られる危険性がある。

教職員は、多忙化・管理強化の下で子どもとふれあう時間が取れないので、子ども一人ひとりの個性を把握し、その実態に適応した指導が困難になっている。また、管理強化の中で、仲間同士の忌憚のない話し合いも減り、学校現場に必要・不可欠な協力・協同作用が失われてきている。その結果、問題行動の対応と報告文書作成に振り回され、根本的な解決はますます遠のいている。

日の丸・君が代強制 全道的に反対の取り組みがすすめられているが、非常に厳しい状況におかれている。強制が強化される中で本質的な反対の学習が少なくなり、声が弱まり議論が続かない。

それを見越したように自民党は、日常的な「国旗掲揚」を求めて道教委に迫っている。（道立高等学校三〇〇数校の約半数が毎日掲揚されている。道高教組の組織率は低く、反対をかかけてきたが、闘えていなかった）

土曜授業 文部科学省は授業時間の確保の観点で実施を通達した。（月二回を限度としているが、教職員の勤務時間の関係であり進んでいない。）

道教委は、一応通達に従って一部の高校で試験的に実施している。全道的にどうするか態度は明らかにしていない。

処分強行 ①「服務実態調査」・「組合活動調査」 三月二六日に「組合活動調査」に關わる処分を強行した。（懲戒処分七五名、文書訓告三三〇名、文書注意六四五名合計一〇五〇名。その他に服務上の指導二九二〇名。昨年の処分数と同程度である）懲戒処分の大部分が管理職であることから、今後さらに管理強化が図られる。

長時間労働 某機関の時間外勤務実態調査によれば、教職員の月平均時間外勤務時間は、平日五四時間一七分、土日一四時間四八分合計六九時間〇五分となっている。自宅に持ち帰ってする仕事の時間は入っていない。しかも、上位二五％は、九一時間以上も時間外勤務をしており、過労死ラインである八〇時間を超えている。

北教組は、一〇年以上この問題について解決を迫ってきた経過がある。道教委は、道議会において、時間外勤務縮減推進会議を設けて検討を進めていると答弁しているが、やる気は見えない。

「主任制度」「主任手当制度」「反対闘争」

反対闘争は、弱体化しているが、継続されており、手当返上闘争は、道教委の口座閉鎖によって頓挫を余儀なくされた。「主任手当」は、労金口座に積み立てられており、その額は五〇億円を超えている。この「主任手当」を道民の手に戻そうとする方針が一昨年決定され、検討委員会を経て結論が出された。これまでの積立金には、従来の議論経過があることから、手を付けないことになったようである。

年額約八〇〇〇万円であり、手当返上組合員から北教組本部会計に振り込まれるまでの送料・事務経費などを差し引いて次のようにする。

- ① 高校生の奨学金（四月の公・私立高進学者、全道二五〇人に一〇万円）
- ② 福島原発被災者支援NPOに対する支援金 五〇〇万円
- ③ 電話教育相談事業費 五〇〇万円

日教組政党支持問題

「民主的でありベラルな政治勢力との支持協力関係を構築する。」との本部原案に対して共産党系代議員より何を勘違いしたのか「一定評価できる。」との発言があった。しかし、日教組本部が「民主党支持」と明記できなかっただけである。先の参議院選挙においても「政党名（民主党）ではなく日教組出身の候補者を中心に候補者名を記入するように」との指示を出していたことから、組合員の批判をかわすだけの苦肉な・皮肉な方針である。

（立花 創暉）

さあ、国労らしく、闘いの一步を踏みだそう！

― 職場の焦点は、要員不足 ―

一〇月二七日第一二七回国労上野支部大会が開催された。大会では、執行部が当初予想もしなかったほど、近年にない活発な議論が行なわれ、出席代議員二五名のうち一九名というほぼ全員が発言。しかも、討論時間は二時間近くに及んだ。

一つには、JRの合理化による職場労働者への犠牲が限界にきている証左であり、二つには、このことを国労はしっかり取り組めという組合員の期待そのものである。機関役員は改めて姿勢を正し、職場と共に、これ以上の人減らし合理化を許さない、労働条件の改善をはかる闘いをつくり出そう！

組織化 「労働協約改訂では署名だけではなく、次の運動が必要だ。食う寝るトイレ、見えづらいITV、連続乗務など、JR北海道だけの問題ではない。メガネをせずに乗務して下ろされ、日勤教育で毎日反省文を書かされた組合員がいる。『反省の仕方が悪い』と会社は常軌を逸している。分会で抗議し、出された訓告処分にも国労仲間が激励した。東労組の青年部はしっかり見ている。今月も一人東労組から脱退。受け皿づくりが急がれている。」（車掌）

「昨年一〇月委託実施されたが、特休数がJRより少ない。出向が終わる三年後、どうなるかが心配。会社は『トイレ寝室の清掃、リネン交換してほしい』と言うが、『団交での話と違う』と抗議して、やらせていない。国労が声をあげることでプロパーの組織拡大にもつながると思う。東労組の出向社員は団交に出席している。」（車両

センター)

人がいない 「設備メンテは人減らしの施策だった。電子化は故障の際、影響が大きい。パートナー会社任せにせず、JRが関わるものが大切。技術継承ができない、宿直勤務が回せないのも要員不足。団交ではタブーっぽくなっているが、要員問題を言い続けることが大切。」(電気)

「今年の三月は、三徹一〇人のうち六人が採用一年未満の社員で、研修やグリーンスタッフの雇い止めが重なり、出札のできる人が二人だけという異常な状態になった。慣れないからミスは続出するし、年休も取れない。今のままでは駅の質の低下は防げない。GS制度の廃止等声をあげてほしい。」(駅)

「技術継承問題では、主任も平成採用のため、自分の仕事は一生懸命やるけど、指導ができない。外注化してきたツケ。会社は『六カ月教育で』と言うが無理であり、リーダー会議に国労組合員も入れて『マンツーマンで若手を育ててほしい』と言い出している。若手はサービスマンが慢性化している。年度末に工事が集中するので、団交を開催し平準化してほしい。」(建築)

「夜間一人の駅では、一人作業のストレスから自律神経失調症で病欠が出ている。遺失物委託が、緩行ホームの委託になり、風呂掃除まで委託業務が広げられた。アクセス(清掃委託会社)では、二札二拍手が強制され『言うことを聞かないとどうなるかわからないぞ』とまで脅かされている。『委託会社へはJRを通じて指導させる』から進んでいないではないか。『駅の遠隔操作』も提案

され、常磐線の社員からは不安の声が出されている。」(駅)

接触事故 「七／一五の触車事故後、昼休みに数回職場集会を行い、『要員が不足しているので、巡視時に、ついで作業をしないと仕事が回っていかない。』という職場の実態から、①要員の確保 ②ついで作業は行わないことを現場長に申し入れ、交渉したが、平行線のまま。」(保線)

「新入社員が十分な教育もないまま即配置され、電気を止めてしまう事故が多発している。ベテランへのしわ寄せで超勤も多く、年間の制限時間に七人中三人が達してしまっている。一月からはテムズから逆出向をもらうことになったが、東労組の社会人採用者が『要員不足を全員で会社に言おう』とまで言い出している。五〇・五五歳での若年退職が増えているのは労働条件が厳しいからだ。」(電気)

「簡易な作業の拡大を会社は平気で行う。国労は『触車につながる』と指摘してきたが、今回の事故になった。会社との面談で『要員が足りない』と言うと、『皆さんから言われました』と会社も認めざるをえないが、見張りの再訓練や四線並列区間での作業のやり方変更など表向きの方策で終わっている。何故起きたのかはつきりさせないともた起きる。職場は、宿直後も残らないと仕事が回らない。若手は、業研マイプロでタッチ後も仕事せざるをえず、『うちの会社もブラックだ』と。『安全なくして労働なし』が死語になっているが、定年まで安心して安全に働ける労働条件を勝ち取るために少しずつ声を出していきたい。これをしないと国労は組織拡大につながらない。」(保線)

「昨年は橋桁に車がぶつかるなどの事故が三二四件も起きた。指令からの携帯電話を枕元に置いての仮眠で、一晚に二件あったこともある。ホームドア、バリアフリー、耐震化などで工事が増加。プロパー社員など月一二〜一四夜勤で健康破壊が心配。台風など何かあると緊急点検で、今年もう八件。通常業務をやりながらなので超勤になる。昨年の超勤データを換算すると八人足りない計算だ。」(土技セ)

『駅の遠隔操作』は今後、委託駅を含め常磐線等軒並み導入されるのは必至。駅では現在でも一人何役とやっており、他の駅・職場まで対応できる余力はない。『要員が逼迫』と言うが、グリーンスタッフなどいつでも首を切れる雇用体系を取ってきた結果だ。昨年春に委託された新幹線乗換口に向向に出された組合員は、GS出身(基本給一六万)の若者たちに、『君たちの思いを俺が言っていくから、皆で要求していこう。国労と一緒に頑張ろう』と話すが、彼らの不満・苛立ちは解消することなく、チャンスあるものは転職・退職していく状況だ。(駅)

専従や書記の配置を 今大会では、特に執行部からの提起はなかったが、専従や書記の配置といった闘いの基盤整備についても代議員の議論が集中した。

「専従や書記の配置がなくなつてから、連絡体制や機関紙類の配布が不十分で、国労運動が見えなくなつた。OBか誰か、支部に詰めてもらうようにしてほしい。」(車掌)「事務所を明け休みの役員だけで回すのでは大変、書記を何日か置けるように」(電気)が典型的だ。

自前ででも専従や書記を配置する体制を作るなど、闘える態勢を作る方向で議論したい。

私でよかったら呼んでください！

—「毛利孝雄(mochan)の沖縄レポート」協力をお願い—

沖縄生活の二年間余は、「復帰」四〇年という戦後沖縄社会の節目にもあたり、様々な刺激的議論や取り組みに立ち会うことができました。五回目となる世界のウチナインチュ大会の興奮も忘れることができません。

しかし、何といってもオスプレイ配備をめぐるこの一年余の闘い、さらには先行する辺野古や高江の闘い、その現場を共有しようと沖縄大学の学友たちと努力した日々は何ものにも代えられない経験だったと思っています。

六月にこちらに戻って地に足のつかない日々悶々としていたのですが、下記のような内容で「毛利孝雄(mochan)の沖縄レポート」の報告活動をはじめることになりました。

これまで何回か小さな集まりで報告をする機会があり、写真データなどの整理はしてきました。もとより研究者でもなく、運動に責任を持っていくわけでもない私に、どれほどできるか分かりませんが、私なりの「沖縄レポート」を「本土」のなかで伝える努力はしてみたいと思います。少しでも沖縄と「本土」との溝を埋め連帯の橋を架けることになれば、それが二年間沖縄に学ばせてもらったことへの、私としてできるささやかな努力のひとつとも思っています。

私の報告でよければ、ぜひ呼んでください。できる限り希望に合わせて伺うつもりです。

「毛利孝雄(mochan)の沖縄レポート」として準備しているのは次のような内容です。報告の内容と時間については、事前に相談して決めましょう。

①ビデオ (DVD) 上映

・「標的の村」(QABテレビVer・四七分)

・オスプレイ映像(墜落事故/デモフライト・いずれも一分)

②写真映像(パソコンを使つての映写と解説)

・オスプレイ配備をめぐる普天間基地ゲートの攻防/辺野古・高江の現在(四〇分)

・オスプレイ配備をめぐる沖縄大学学生たちの創造的取り組み(四〇分)

・沖縄大学での学びとフィールドワークをもとに、「本土」ではあまり表に出ない

沖縄社会の諸相(歴史・文化・教育・自然など)を切り取るレポート(六〇分)

③沖縄を学ぶということ

・オスプレイの「現場」から考えたこと―沖縄留学を終えて―

・沖縄の伝統的共同体から地域の「豊かさ」を考える―久高島と西表島を例に―

＊「沖縄と憲法」 “「3・11」後をどのように構想するか” が問題意識です。

④沖縄音楽

・艦砲め喰えーぬくさー／でいご娘(CD・五分)他、多数

・わたし自身の唄三線は、あと一年はかかりそう！

〈連絡先〉 毛利 孝雄 (沖縄大学地域研究所特別研究員)

〒356-0007 埼玉県ふじみ野市北野1-8-6

E-mail mochan-123daa@tbz.t-com.ne.jp

オスプレイの「現場」から考えたこと―沖縄留学を終えて―

- 1、やりたい放題のオスプレイ運用
- 2、軍用機の「安全性」
- 3、背後に控える沖縄への自衛隊配備
- 4、「沖縄は基地で飯を食っているわけではない」
- 5、戦争につながるものすべてに反対する―「オール沖縄」「県外移設」が孕む陥穽
- 6、「現場」が紡ぎ出すもの―歴史継承運動としてのオスプレイ闘争
- 7、「3・11」後の世界へ―「自立」「独立」「自己決定権」

沖縄の伝統的共同体から地域の「豊かさ」を考える

―久高島と西表島を例に―

1、オキナワ留学へ

2、久高島―「久高島土地憲章」と「留学センター」

3、西表島・祖(そ)内(ない)―地域の紐帯を紡ぐ

4、伝統的地域共同体・沖縄戦体験を基底とする地域主権「沖縄モデル」

〈附〉久高島土地憲章

人間的成長を求めて

―信州 松本、小布施、飯綱、長野への旅―

十一月二十一日から三日間、信州を旅しました。「学都」松本市、「北斎・一茶の里」今ほ町おこしのモデルとされる小布施町、「リンゴの里」飯綱市、「県都」長野市です。連日、これ以上ない快晴続き、北アルプスの山々に囲まれたこれらの町、雪を被った北アルプスの景観はなんと素晴らしかったことか。第一一五七（一二月一日）号でお知らせした「通信」の新たな出発を、天までが祝ってくれているかのようでした。この旅の目的は読者、友人の日々の生活・活動を直接目にし、さらに知見を深めることです。私たちの回りには専門的知識を持つ人がいっぱいいらっしゃる。遅まきながら人間的成長を求めてです。

松本 ザ・ハーモニーホール

松本は松本市音楽文化ホール（ザ・ハーモニーホール）での「ザ・フレンチ・コネクション in 松本 パユ・ケラス・ラングラメ」の一夜限りのコンサート。トリオがかなでる調べはハーブ、チェロ、フルートの例を見ないとりあわせ。ここで、今日しか聞けない音楽会です。

プログラムにある曲はシューマン、ブラームスの他は始めての一九世紀半ばから二〇世紀の作曲家たち。古典音楽は「諧調」の世界、一九世紀末からの音楽は「乱調にあり」ですから、興味はいやますばかりです。

ザ・ハーモニーホールのコンサートは、友人の元松本市役所の労働者としてふんばってこられた中澤秀行さんが、音楽ディレクターとして企画・立案、興行されていらっしゃる。今、企画の斬新さ、新人奏者の抜擢ぶりは東京オペラシティやサントリーホールをしのご評判を勝ち得、熱心なファンを興奮に巻き込んでいるのです。

東京での演奏会、見ず知らずの聴衆が演奏前や後に、音楽会の企画、感想を語り合うことはまずありません。松本では違いました。老若男女の音楽好きのみなさんは、私たち余所者（よそもん）に、「中澤さんは私たちが聴きたい、東京以外では聴けない企画をしてください。中澤さんは私たちの「宝物」。今日は、このトリオのためにわざわざドイツからも参加していらつしやるのよ」と、気軽に話しかけてください。

ハーモニーホールは奏者・ディレクター・聴衆が一体となつてコンサートを盛り上げていくのです。向坂逸郎先生は、人と人との結び合いについて、常に「精神的影響力」ということを強調されておりました。中澤さんはまさに、音楽をつうじて先生の精神を実現されているのです。彼は職業柄、よく上京されます。時間が合えば、たまに食事、会話を楽しみます。そんな時、彼が大きな鞆から取り出すのが何年もの間読み込んで、手あかにまみれ、付せんでいっばいの社会科学の古典でした。

開演ブザーが鳴り響きます。主役の登場です。いずれもメートル八〇センチを超えようかという大男と大女。会場（定員は六九三席）はほぼ満員、割れんばかりの拍手が会場を揺るがし、そして一瞬静寂が包み込む。

音楽会は「不安・苦悩・変調こそ美」であるかのように進行します。奏者はいずれ

も世界のスーパースター、彼らは「ぼく、私の技術が最高」と、ソロ、デュオ、トリオで競い合い、闘い合うかの演奏に聴衆は酔い痴れておりました。

はじめての松本の音楽会で得た大きな教訓は、演奏者に己の想いを熱く伝え、気持ちを共有し、会員・音楽ファンに伝え、共感を引き出す情熱と熱意こそが、一人ひとりの心をとらえることができるという、当たり前だけど実践すること困難な原則です。

小布施町 人口一万人、観光客二二〇万人

小布施町へは松本から長野へ、長野から松本電鉄で三〇分。信州長野県でいちばん小さな自治体です。町が発行するパンフレットにはこうあります。

「半径二キロメートルの中に全ての集落が入る、長野県で一番小さな町。千曲川と松川が合流する地点にあり、二つの川が合う『逢う瀬』が『小布施』になった。

六百年の歴史をもつ小布施栗や郷土料理が自慢。住民参加の『花のまちづくり』も盛んで、四季折々に彩る花の美しい町。小布施は江戸の昔から、訪れた文人、画人を魅了し、葛飾北斎や小林一茶などが多くの作品を残している。」

人口はたったの一万一三八一人です。しかし、この小さな自治体が夜空に映える薪能の舞台のように光り輝いているのです。皆さん、この小布施に年間どれほどの観光客は訪れると考えますか。「十万人くらい?」、そんな半端な数じゃありません。「二十万人?」。ぼくもたまげた、なんと二二〇万人というのです。

地方自治体は資本主義の「儲け主義」がそうするのですが、過疎化による荒廃と人口減が財政を直撃し、どこも四苦八苦です。その弥縫(びほう)策が平成の大合併。自治体首長は手切れ金でしかない補助金に飛びつくことで、地域社会は再生できると、とんでもない勘違いをしてしまったのです。自治体の面積は大きくなりました。しかし、過疎化はそんなことではとまらない、少子化が追い打ちをかけます。小布施町は自らの力で町おこし・まちづくりに立ち上がったのです。年間百万人超の「お客さん」はその結果に他なりません。

小布施町は第二次大戦中に空襲を受けておりません。古い民家、建造物は建築当時のまま残り、北斎や一茶が訪ねた古刹は健在です。それをもっとよく示すのが岩松院天井画(北斎晩年の作「八方睨み鳳凰図」)であり、町内に残された北斎作品を集めた北斎館です。栗、北斎、一茶を基礎に町づくりは「地産地消」の広がりとともに力を増したのです。

駅に迎えに来てくださったのは、連れあいの親父の実家(茨城県玉造町)の末娘、関悦子さん。「自然を愛し音楽を愛する楽しい家庭をつくるの」と初々しく語って小布施に嫁いだ彼女。「四十年ぶりの再会だね」とお互い感動の挨拶。若い頃とちっとも変わっていない初々しさ。今小布施町のまちづくりに深くかかわっていたのです。

「小布施は、風の通りや太陽の恵みも考えてつくった子どもや若者の広場が町の誇り、住民の暮らし最優先の環境整備、町民が自らの庭を開放する『オーブンガーデン』、観光客もふくめ誰もが個人宅百三十軒の庭を通り抜けしながら、町を散策できる。」

「町の人と訪問者の交流が生まれやすいです。地元産の栗も果実もそのまま

なく加工し付加価値を付けて売るので、経済効果も考えながらね」など小布施のまちづくりの経過や、小布施の魅力をすみからすみまで案内してくれました。

飯綱市 リンゴ園

長野は私たちにとっては第二の古里でした。私は一九七〇年代の青年時代、全通長野の青年部を中心とする皆さんと、それぞれ毎週のように学習会。長野全通会館は組合員の梁山泊でした。そこで知り合ったのが若き山浦隆芳さん他数十名の仲間たち、そして彼らを叱咤激励された市川友也さん。

連れあいは国労紋別闘争団のオルグ地域が長野と決まった時、闘争団員や松田肇さんのご家族と一緒に、闘争団支援物販のホッケ販売に汗を流したことがありました。

「リンゴの里」豊野・上水内（平成の大合併で今の地名は飯綱市）行きは、妻の「山浦隆芳さんが愛情こめてこだわりを持って作っていらっしやるりんご園を愛でてみたい」の一言に始まりました。連絡すると「歓迎します、取り入れはほぼ終わっていますが、一本だけ残しておきます」との嬉しい返事。「信越線で豊野下車でしたよね」の問いに、「車なら小布施まですぐです、宿まで行きます」。

車は松川溪谷沿いに一路豊野へ、溪谷は紅葉の素晴らしさを思い浮かばせるものだった。山浦氏、「ここの紅葉は素晴らしい、今は枯れ葉ですけどね」。走ること三〇分、丘陵を切り開き作られたリンゴ畑が見えてきた、延々とつづく。「ぼくのりんご畑はもう少し先き」と、リンゴ畑の間を車は走りぬける。

「あの突きあたりが我が家」といつの間、山浦宅に到着。山浦ご一家の愛犬、柴犬のこたろうくんがまず歓迎してくれました。あいさつもそこそこに「リンゴ見に行きましょう」と納屋から三つも四つも大きなかごをもち、自宅裏のリンゴ畑へ。

広いリンゴ園、目を見張るような大きな枝にたわわに実った真っ赤なリンゴ、枝も折れんばかりの木が一本残されておりました。実るリンゴ見るのは始めての私たち。みごとに赤く染まった大きなリンゴにまず感激。恐れ多くもぎ取るなどできません、どうやってリンゴを狩ればいいのかもわからない。「こここう持つて、実を上へ上げればいいですよ」と説明受けたあと、初めてのリンゴ狩り開始です。

そうこうするうちに、りんごの実にも「個性」があることに気付かされた。どれもこれも素敵に実っているがカタチが違うものも。ひしゃげたもの、左右に偏ったものというように。受粉がうまくいかなかったんですよ。愛情こめて作ってるんですけど、真ん中のめしべにしっかりと受粉しないと、売り物になるリンゴはできない。

山浦氏は「土は農業の命です。草を狩り、わらを敷き、小鳥たちがみみずをついばみにくるよう土地を手入れしてる。味の方も甘さと酸味がほどよく調和するように」とリンゴ作りの苦労を語ってくれました。

四方は一面リンゴ畑、あの畑は私のですが収穫を終えました。むこうの畑は地面にアルミのようなものを敷いてるでしょう。太陽の照り返しを利用し色付きをよくする術なんです、私はやらない。本当においしくするには不要な枝葉を取り除き、木々の間隔を十分にとって、太陽の光を十分に取り込む環境をつくってやることなんです。

山浦さんの話と初めてのリンゴもぎに大はしやぎの私たち。すっかり時の経つのを忘れておりました。「そろそろ我が家に行きましよう」。居間には生まれたばかりのお孫さんの写真が宝物のように飾られてありました。

リンゴ作りの楽しさと苦しさ、そして政府の農政についての話を聞いたのですが、メモをとる手はリンゴを取る手なわけで記憶はすっかり薄れてしまいました。あやふやな文章は山浦さんはむろん読者に迷惑をかけるだけ。というわけで、それらの点は別稿で願うことにいたします。

長野 再会

長野市ではもう一つ楽しい出会いがありました。三〇有余年ぶりに元全通労働者の市川友也さんと再会できたことです。これは山浦さんの心使いによるものです。市川さんは活動、学習に厳しかった。そしてじつによく本を読んでいらした。話をするうち、昔より今の方が本を読み、かつ買い、集められていることがわかりました。

「市川さん、お宅は本でいっぱいでは？」と僕。「そうなんです」と市川さん、さらに「古本安くなった。かつて百数十万円した県史もゼロ円。買い集めた本をどうすれば」なんて楽しみと苦しみを、それこそ楽しそうに話していらつしやいました。

(滝野 忠)

◇読者からのおたより◇

JR北海道の一連の問題 (こぶさたして) 北海道は今週から本格的な冬が始まりました。それでも当地はまだ良い方で、陽がさせば外を歩くのに不都合はありません。そうは言っても、朝事務所(旧闘争団事務所)に出てくると十時くらいまではストーブの前で本を読むのが精一杯です。相変わらずJR北海道の一連の問題が全国ニュースになっています。遂に昨日はレール幅の検査結果を改ざんしたことが明るみに出てしまいました。今回は内部からの告発があったのでしょね。我々の側から見ると一連の事故や不祥事は全てが分割・民営化の歪みとしてすんなり理解できるのですが、マスコミはまだそこまで言い切れないでいます。そんな中でも道内では徐々に核心(の周辺)を意識した記事がでるようになりました。参考までに送ります。

一つは道新の特集記事で、十一月三日から七日まで連載されたものです。もう一つは「財界さつぽろ」十月号の記事です。「財界さつぽろ」は一応道内の財界ではオピニオンリーダーの役割を果たしている雑誌ですから、それなりに影響力があります。その記事の中に本文では直接触れていない、闘争団の旭川駅前での座り込みの写真が記載されているところに編集部の本音の一部が現れているようです。これらの一連の問題が表面化したのが一昨年起きた、石勝線のトンネル内での車両火災事故からだと言うのはいささか皮肉なものです。採用差別事件が収束して押さえが効かなくなつたと思えるのは、少し穿ちすぎた見方ではありますが、当事者としてはついそう思いたくなると思うものです。この問題を国労がどう活用できるのか、過大な期待は待てないにしても見物です。組合員資格がないことは何とも悔しいことです。

(北海道・S)

結成15周年 明石地域ユニオンは、今年で結成15周年を迎えます。地域の仲間とともにたたかっていた15周年を振り返り、改めてユニオン運動の意義と課題を見つめながら、さらなる飛躍を果たすために、15周年記念事業を行います。組合員はもちろん、皆様の積極的な参加をお願いします。◆15周年記念パーティー開催(日時・12月15日正午〜2時半、場所・明石グリーンヒルホテル、会費・三千元、◆川柳・キャッチコピー(標語)募集 働く者の思い・ユニオンへの期待などを自由に言葉にしてください。記念パーティーで参加者が審査、入選者に豪華賞品当たります。◆ユニオンニュース記念号の発行 12月に、15年間の活動の足取りをまとめた約20ページの記念特別号を発行します。◆記念グッズ(オリジナルパンダナを作成中)、無料配布、お楽しみに! ◆「ユニオン応援団」を募集します。「サポーター」改め、新たに「ユニオン応援団」を立ち上げます。(明石地域ユニオン)